

中米「希望の10年」の現実
経済至上主義で拡大する貧富の差

債務危機に陥ったエルサルバドルやグアテマラの八十年代は、東西冷戦の代理戦争の舞台となり、内戦の嵐が吹き荒れた。中南米の「失われた10年」といわれる所以である。九十年代に入り、これら各国の内戦は終結し、経済活動は活発となった。そこで今度は、「希望の10年」とも名付けられた。しかし、その希望は本当に現実のものとなったのだろうか。



湖畔のゴミ捨て場。一日の労働を終え、近くのスラムへ帰る一家。(ニカラグア)



4年前にやっと電気がきた。暑い1日の終わり、姉と妹が楽しげに語り合っていた。都市と農村の生活格差はますます広がっている。(エルサルバドル)

好調なエルサルバドルでも、今後年平均3%の経済成長があったとしても、人々の貧困状態が解消されるのに九八年もの期間が必要だとされる。貧困が原因で発生する強盗などの犯罪の増加も深刻な問題である。暴力への慣れや一般化は、三十六年続いた内戦の負の遺産の一つだと言える。グアテマラの殺人事件の割合は一九九六年度、アメリカの約五倍、一〇万人あたり四十八人の犠牲者を出している。軍部が力を握っていた時代、今ほど凶悪犯罪が野放しになっていなかった。

エルサルバドルの首都サンサルバドルの下町は相変わらず騒々しく、高級住宅街の静けさとは正反対だった。方向感覚を失うほど大きく入り組んだメルカード(市場)では、野菜や日用品を売る女たちの元気な声が響きわたっている。表通りを歩くにも緊張する治安の悪さも妙に懐かしい。

三年ぶりのサンサルバドルで大きく目についた変化といえば、一九五六年から改修中の大聖堂が三月末にやっと完成し、サンサルバドルの下町には不釣り合いの美しい外観を誇っていることくらいか。一九九二年に停戦の祭典が行われたパリオス広場は改修中のため閉鎖され、そこを住所としていた路上生活の子どもの姿は見られぬ。

一ブロック離れたラ・リベルタード公園の方へ行ってみる。閉館となった映画館の向かいの空き地に、子どもたちがたむろしていた。手には、シンナーを含んだ接着剤入りのビニール袋を握っている。シンナーは空腹も、疲れも、何よりも寂しさを紛らわせてくれる。そこは、数少ない観光客が足を運ぶ大聖堂周辺から追い払われた路上生活者たちのたまり場であった。



36年に及んだ内戦の犠牲者は20万人にもたつする。犠牲者のほとんどは地方に住んでいた先住民である。協会で涙しながら祈り続ける千住民族の女性(グアテマラ)

路上で時計修理の屋台を開いている親爺さんが、カメラを手にした私の行動をじっと見ていた。「ここは危険な場所だから、早く離れた方がいい。彼の論すような穏やか口調は、奮い立たせていた私の撮影気力を奪ってしまった。それとほとんど同じせりふを二週間後、隣国グアテマラの首都グアテマラシティで聞かされる。首都の五番地域にあるスラムを撮影中、警戒中のパトカーから声をかけられた。「ここは危険な地域だから、すぐに立ち去りなさい。でないと...」。警官の一人はあごの下に手をあて、首をはねる真似を

たむろしていた。手には、シンナーを含んだ接着剤入りのビニール袋を握っている。シンナーは空腹も、疲れも、何よりも寂しさを紛らわせてくれる。そこは、数少ない観光客が足を運ぶ大聖堂周辺から追い払われた路上生活者たちのたまり場であった。



アルバロ・アムス大統領はグアテマラ内戦に終止符を打ったことで記憶されるかもしれない。だが、貧困の原因である代土地所有制度の改革や先住民の権利保護などに手を付けられなかった。(グアテマラ)



首都グアテマラシティの郊外に広がるスラム(グアテマラ)

した。



ゴミ捨て場に生活の糧を見いだす人々の数は一〇〇〇人近い。3年前とも変わらぬ、衣食住がこの場所でもかかわれる(エルサルバドル)



仕方ないなあと、スラム近くにあるゴミ捨て場へと向かった。そこでは、コ

中米一の規模を誇る近代的なメトロ・セントロ(ショッピングモール)は、ゴミ捨て場から車で約30分の距離にある(エルサルバドル)

ミに生活の糧を求める千近い人たちが、ひっきりなしにやってくるゴミ収集車の後を追っかけている。

中米のニカラグアでは一九七九年、極端な貧富の差を生みだした独裁体制に対して抵抗運動が起き、社会主義国家が成立した。これに続き、エルサルバドルでは一九八〇年代はじめから、グアテマラでは一九七〇年代から政府軍と反政府ゲリラとのあいだで長引く内戦が激化した。

一九八一年に発足した米国レーガン政権は、これらの紛争を、旧ソ連・キューバによる「社会主義革命の輸出」であるとみなし、中米各国の軍事政権に、巨額の財政的援助と軍事訓練を実施し、内戦にさらに拍車をかけた。エルサルバドルは今年三月、一九九二年の停戦から二度目の大統領選挙を迎えた。アメリカとインドで教育を受けた弱冠三十九歳のフ・ロドリゲス氏

が圧倒的な強さで当選した。クリントン米大統領はその直後、米大統領として三十年ぶりに中米4カ国を歴訪し、過去の中米政策の誤りを謝罪する演説を行った。米国主導のネオリベラリズム(新自由主義)政策を一層後押しするためだ。



米粒に混じったゴミを取り除く女性。旧ゲリラ組織が創りあげた村の家には、3月の大統領選挙の支持政党のポスターが貼られていた(エルサルバドル)

「選挙の投票に行っている間に、家に泥棒が入る。昔は、貧乏人が貧乏人を襲うことなどなかったのに」。五年来の友人はそう私に語った。経済が比較的

中米の写真セクション

- [エルサルバドルのページへ](#)
- [グアテマラのページへ](#)
- [ニカラグアのページへ](#)

[ルポルタージュ インデックスページへ](#)